

津守焼とは

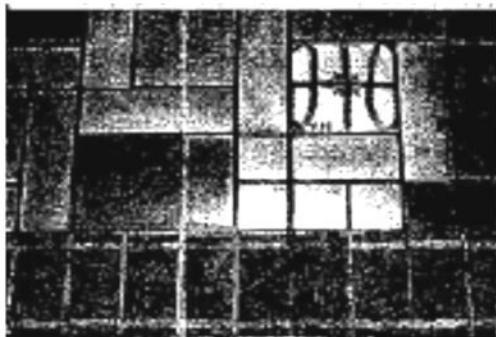
地場産業の「レンダリング」の処理から発生する牛骨灰の活用と高齢者・障がい者の「生きがい」「働きがい」が融合し、西成ブランドのタイル”津守焼“は創り出されました。

“津守焼”は西成区の地場産業である「レンダリング」の処理から出てくる牛骨灰に土や粘土を混合し、生きがい労働事業団『西成陶工』に集まる地域の高齢者や障がい者の人たちが一枚一枚手づくりで焼きあげられてできた地元西成ブランドのタイルです。

レンダリングから発生する産業廃棄物(獣サイ処理物：牛骨)の活用と、高齢者や障がい者のものづくり(手づくり)の技術が融合し、“津守焼”という新たな地場産業を生み出したともいえます。津守焼タイルは、手づくりならではの独特的風合いと、生態系の保護、活性化などの優れた性能を有しており、内装タイルや外構タイルだけでなく、壁面レリーフとしても、活用されています。

＜まちかどホーム「すずらん」エントランスホール＞

＜オリジナル絵付タイル＞



“津守焼”は、陶芸家の監修指導のもと、高齢者と障がい者からなる「生きがい労働事業団『西成陶工』」によって生産され、粘土を練る、骨灰の混合など一連の作業工程をすべて手作業で行い出荷する、まさに100%手づくりのタイルです。骨灰の混合によって醸し出される“温かみのある質感”と手づくりならではの“独特的風合い”とともに、生態系の保護、活性化といった効果や路面温度下げ、地球温暖化防止にも役立つといった特徴があります。まさに骨灰という「廃棄物」が、高齢者や障がい者により「地球環境に優しいタイル(製品)」に変貌したといえます。

津守焼の製作は、西成区北津守の「生きがい労働事業団『西成陶工』」で、地元の高齢者、障がい者を中心に“Art for Life”をテーマに幅広い創作活動に取り組んでいる

陶芸家吉野義隆氏の指導監修のもとで行われました。原材料の粘土を練る段階から骨灰の混合、型抜き、施釉、そして燃焼にいたる一連の作業工程を全て手作業で行い出荷するという、まさに100%手づくりタイルの生産です。いわば西成の職人技と北欧の伝統的手法から生まれたれんがタイルといえます。

津守焼タイルの特徴は、骨灰の混合によって醸し出される温かみのある質感と手づくりならではの独特の風合いで、その他、タイル自体に含まれる骨灰が不純物の浄化、臭気吸収作用を促し、今や環境問題にもなっている酸性雨等が路面下に浸透する段階での、フィルター的役割を果たし、土を中心化させ、生態系の保護、活性化といった効果にも期待できるものです。また、低い熱反射率は路面温度を下げ地球温暖化防止にも役立つている『環境に優しいタイル』です。

<作業風景>

型押し作業



型抜き作業



施釉作業



北津守公園の遊歩道をはじめ、まちかどホーム「すずらん」(特別養護老人ホーム)で外構タイル、内装タイルとして活用されています。また、地元の高齢者や障がい者の人たちと地域の子ども達が一緒になってタイルに絵を描くなど、住民が主人公になった街づくり活動にもなっています。

<当時の新聞報道>



高齢者や障がい者は「食べていくために稼ぐ」ことから、“津守焼”製作（労働）を通じて「生きがい」「働きがい」を開花させました。生きがい労働事業団は、単に生計維持のために働くのではなく、労働を通じて自己実現を図り（「生きがい」）、自尊感情を高めることができるような「働きがい」を支援しており、西成陶工はレンダリングの産業廃棄物を“津守焼”という新たな西成ブランドに育て上げました。

“津守焼”は高齢者の就労を通じた生きがいと健康増進、さらに障がい者の自立と社会参加の促進を図る取り組みから、生まれています。高齢者の仕事は同和地区のみならず、一般的に少なくなっていますが、年金を受給するので働く必要がなくなる人もいますが、同和地区の場合は無年金者が一般地区に比べて格段に多くなっています。そのため仕事をしなければ生活ができないが、仕事はないという状況でした。また、年をとっても働きたいという要求も出始めました。

こうした実態を踏まえて、社会福祉法人ヒューマンライツ福祉協会が設置主体となって高齢者及び障がい者が就労を通じて、生きがいの獲得とリハビリテーションなどの健康増進並びに安定した生活基盤の補助を図ることを目的として1995年9月に「生きがい労働事業団」が設立されました。従来の就労支援は「食べていくために稼ぐ」ことを大きな目的としていましたが、労働が個々人の生活の多くを占めていることを考えれば、労働をつうじて社会参加や自己実現を図る支援が大きな課題となっていました。生きがい労働事業団は、単に生計維持のために働くのではなく、労働を通じて自己実現を図り（「生きがい」）、自尊感情を高めることができるような「働きがい」を支援していくものです。

ただ設立当時、登録者・登録希望者の数に比して仕事の量も少なく、労働の内容も「公園清掃」に限られ、必ずしも高齢者の多様なニーズに対応できていないという指摘があり、さらなる職域の拡大として『生きがい労働事業団・西成陶工』が、西成区の「街づくり」に向けた地域活動の一環として1997年6月に設立されました。

タイル製作の風景



タイルは高齢者、障がい者の手づくり



“津守焼”の原材料は、レンダリングから生み出される産業廃棄物である獸再サイ処理物（牛骨）です。レンダリング産業は、化製場から出る「悪臭」、「原料の確保」、「労働力」の問題を抱えており、原料の確保が難しくなれば、より付加価値の高い製品を生産することが求められていました。

“津守焼”の製作はレンダリングで生じる産業“廃棄物”を“付加価値の高い製品”の開発と、労働を通じて「生きがい」「働きがい」を求める高齢者、障がい者の就労の「場」とを、街づくりで結びつけた活動といえます。

西成区の地場産業であるレンダリングは、食肉市場の生産活動に伴って、発生する畜産の廃棄物処理機能として存在し、大都市において食肉を円滑に流通させるのに必要不可欠な産業としてその役割、清掃事業に類した公共的な側面を有しつつ、廃棄物を加工して再び資源として利用するという今日のリサイクル産業の先駆けとして存在してきました。

「レンダリング」は牛や豚の骨や脂を加工処理する化製業のことです。原料肉を処理する際、肉のほかに「血液」「皮」「骨」などに分けられ、レンダリング工場はそのうち「骨」の処理を行っています。血液は精製処理されたあとに化粧品や医薬品の原料として、生皮は皮革材料として靴や鞄などに利用されます。骨も精製分離することによって、医薬用や工業用として利用価値が高く、その用途は非常に多彩です。

ただ、西成のレンダリング産業は、化製場から出る「悪臭」、「原料の確保」、「労働力」の問題を抱えていました。「原料の確保」が難しくなれば今までの肥料やにかわなどの製造から転換し、より付加価値の高い製品を生産することが求められていました。肥料や食料原料といった一次加工のみにとどまっているだけでなく、骨粉、エキス、油脂などの原材料の持っている強みを生かして、付加価値を増す二次加工、三次加工を可能にする研究や技術取得を重ねると、西成グルメブランドとしての食品指向事業やボーンチャイナ（骨灰磁器）事業などの展開の可能性もあると指摘されていました。

西成ブランドのタイル“津守焼”は、レンダリングで生じる産業“廃棄物”を“付加価値の高い製品開発”へのリサイクル活用と、労働を通じて「生きがい」「働きがい」を求める高齢者、障がい者の就労の「場」とを、街づくり委員会がマッチングさせることによって生み出されたものといえます。